

児童一人一人を伸ばし体力向上を図る体育指導法モデルの開発と地域一体型体育活動

その他一体力の向上と学校体育活動の推進

◆ 所属・提案者（◎代表者）

坂戸市立入西小学校

◎萩原 雄磨

ねらい

本校は、1000人を超える児童数の大規模校で、特に児童の体力向上が課題であった。その背景には、児童数が多いことによる、校庭使用場所の制限や教具の不足、授業での具体的な指導内容や方法が不明確であることなどがあげられる。

そこで、全学年・全領域における「体育指導法モデル（教師用指導資料）」の作成により、学校全体で体育授業と体育活動を充実させることで児童の体力の着実な向上を図ろうと考え、本実践を行った。

実践内容

（1）体育指導法モデルの開発による体育授業の充実

ア 6年間を見通した学習内容の明確化

体育部で児童の実態把握をし、6年間を見通し、シンプルで技能が向上し、思考が深まる系統性のある教材選びを行い、学習内容を明確にした(資料1)。

イ 体育授業モデルの作成・配付

6年間を見通した教材を基に体育部で全学年・前単元・全領域の体育授業モデルを作成し、単元開始1週間前に各担任に配付した(資料2)。

ウ 校庭ライン計画の作成と環境の整備

どこで、どの学年が体育授業を行うのかが分かる「校庭ライン計画」を作成するとともに、必要な用具や備品を計画的に購入し、体育授業の充実を図った(資料3)。

（2）地域一体型の体育活動

ア 学年に応じた学校共通の学習カードの作成・活用（なわとび・水泳）

児童の実態をもとに、各学年で身に付けさせるべき内容を明らかにし、低・中・高学年ごとに発達段階に応じた学習カードを作成し、学校全体で活用した(資料4)。

イ 業間マラソンの実施とマラソンカードの活用

11～12月の1ヵ月間、業間20分間で持久走に取り組んだ。児童数が多いため、曜日ごとに走る学年を振り分け、さらに校庭を3つのコースに分け、安全に取り組めるようにした。またマラソンカードを作成し、家庭でも取り組めるようにした。

ウ 体育朝会の工夫

年7回の体育朝会の内容は、次の6視点をポイントに、なわとび（短・長）を中心に行った。

1	技能ポイントが明確
2	知識・技能の6年間のつながり
3	少ない用具での運動量の確保
4	技能向上の実感
5	運動の生活科
6	異年齢での教え合い
7	家庭での取組

エ 体力貯金カード・体力アップカードの活用

夏季休業中の体力向上を期して、坂戸市小体連で作成した体力貯金カードを全学年に配付した。また各学年の音読カードにも、体力が高まる運動を載せ、家庭でも体力向上が図れるようにした(資料5)。

オ 学校保健委員会の工夫

写真や動画を積極的に用いてより分かりやすく体力向上に向けての取組や児童の成果などを説明した。

実践時期・期間

○ 平成24年4月～平成27年7月

実践の成果や課題

1 体力テスト結果

体育授業モデルを基に教師が授業を工夫・改善し、環境の整備や学習カードの活用・季節ごとの体育活動を充実させることで、児童の体力テスト県平均値達成率が年々伸び、平成27年度は70%となった。また、総合評価A+B+Cの児童の割合が「埼玉5か年計画」及び「生きる力と絆の埼玉教育プラン」で示された目標値80%を大きく上回り、体力向上が着実に図れた。(表1)

表1：体力テスト県平均達成率及び総合評価A+B+Cの推移

年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
県平均達成率	42%	42%	51%	70%
総合評価A+B+C児童の割合	79.7%	81.2%	85.7%	90.8%

2 技能成果 (体育授業において)

6年間を見通した学習内容を明確にし、教師が体育授業モデルを作成することで、教師が充実した体育授業を実践、工夫・改善ができ、各領域において学習内容の着実な定着が図れた。

3 体育授業モデルについての成果 (教師のアンケート結果から)

体育授業モデルについては全教員(32名)が活用したと答え、体育授業の充実を図ることができた。教師の主な声は、以下のとおりである。

- ・ 図や写真があり、授業の流れとポイントが詳しく乗っていて分かりやすい。(5名)
- ・ 知りたい内容が資料の中にすべて入っている。(3名)
- ・ 資料は、児童の実態に合わせてどう使い、生かして行くかが教師の役割である。

4 保護者の意見

学校保健委員会に参加した95%の保護者が、体力について参考になったと回答し、保護者に体力向上についての理解が図れた。以下は主な意見である。

- ・ 体育授業が考えられて取り組まれていて感心した。(5名)
- ・ 家で体力貯金やなわとびカードを取り組ませしていきたい。(6名)



セールスポイント

本実践を行えば、誰でも、どの学校でも確実に体力が向上する。

他校で導入するポイント

- 児童の実態把握をし、年間の6年間を見通した教材選びをする。
- 体育指導法モデルは、文字をできる限り少なく、図や写真を多く用いる。
- 本実践の体育指導法モデルのデータを編集し、各校に合わせた内容を修正する。

失敗しないための方策

- ・ 児童の実態に合わせて、6年間を見通した学習内容を決める。
- ・ 学習内容はできる限りシンプルにする。(特に用具の準備が簡単な教材を扱う)
- ・ 単元前(1週間前)に、必ず体育指導法モデルを配付する。
- ・ 体育指導法モデルの作成は、体育部で行い、内容をシンプルにする。
- ・ 体育的活動は家庭でできる取組とリンクする内容にする。
- ・ 体力向上は、中期的(4・5年)な視点でとらえ、すぐに結果を求めない。



こうすればより高い効果が得られる方策など

- ・ 授業成果(児童の技能成果)を全職員に伝達する。
- ・ 学校保健委員会等で、成果を保護者にも伝えることで、家庭の協力を得られる。

外部有識者からのコメント

一つ一つの取組内容は、多くの学校で取り組まれているものと思われるが、若い先生方が増える中、それらを体系化してまとめ、基本的なところから共通理解を図っていくという意味で工夫されている。健康体力に関して、特別活動や朝の活動、ライン計画や体育の授業モデルなど、包括的な体育の取組として意義がある。4年間のエビデンスには説得力がある。地域と一体化した取組に発展させるなど、学校保健委員会にとどまらず、様々な地域資源への働きかけも期待される。